願いの魔法
～Wind of Freedom～

赤い死神

目次

プロローグ　夕焼けの下の出会い　1
第一章　魔法使いの恋物語　8
第二章　二人の初デート　22

プロローグ　夕焼けの下の出会い

「クソッ！　風見(かざみ)め……どこまでも忌々しい……」

太陽が地平線へと沈み行き、世界が黄金色に染まる頃。一人の少年が、悪態を吐きながら茜色の空の下を歩いていた。

彼の名は、キース・クラウド。自称、愛の貴公子ラブプリンスである。

そこそこに整った顔立ちと、光に映える金色の髪。称号通り、多くの女生徒から好意を寄せられるハンサム男……というわけではなく、性格に難がありすぎるため、むしろ女生徒からは倦厭されている男子学生だった。

「みんな騙されているんだ！　どうしてこの美しいボクではなく、あんな粗野で乱暴な馬鹿がモテるんだ！　世の中間違ってる！」

今キースを激昂させているのは、同じアーレント魔法学園に通うクラスメイトである、風見俊介(かざみしゅんすけ)の存在だった。

言葉通り、アーレント魔法学園とは基本的に魔法使いを目指す子供達が通う学校である。

授業内容は様々で、一つは一般教養。

数学や国語と言った、基礎的な学力を養う授業。

一つは、魔法具の作成に関する授業。

魔法具というのは、この世界で日本人だけが持っている魔力を物品に流し込み、特殊な力を持った道具を作り上げる授業。

そして最後の一つが、魔法を使った実技の授業である。

魔法とは、体内にある魔力を自身の想像した通りに発現させた物の総称である。その発現方法は人それぞれであり、実技の授業ではその魔法を主な攻撃手段として用いられ、それを使用しての戦闘訓練が行われているのだ。

現在、キースを苛立たせている風見俊介(かざみしゅんすけ)なる人物は、この実技の授業において学年でNO．1の地位にあり、先日行われたバトルロイヤルの結果から、現在では校内でもNO．2の位置にいた。

しかし、そんな事はキースにとってはさしたる問題ではない。キースにとって重要な事は、魔法使いとしての実力云々などではなく、女子にモテるか否か。それだけなのだ。

つまるところ、キースが嫉妬心を抱くぐらいに、俊介(しゅんすけ)はモテるのだ。キースには彼女の一人どころか、ラブレターの一通、バレンタインの義理チョコ一つもらった事さえないと言うのに。

「大体、あいつは西風(にしかぜ)先輩に負けたじゃないか！　しかも情けない事に、その戦いが原因で三日も寝込む事になったというのに！　そんな醜態をさらしておきながら、どうしてみんな風見風見(かざみかざみ)と……世の中、間違ってる！」

そう、先日のバトルロイヤル。アーレント魔法学園の三年生、現代の錬金術師こと西風(にしかぜ)正人(まさと)に敗れ、優勝を逃した俊介(しゅんすけ)は三日ほど自宅で静養することとなったのだ。

そのことを聞いたキースは、それはもう歓喜した。現状からは考えられないほど、朝のキースは上機嫌だったのだ。思わず口笛を吹いたり、鼻歌を歌ったりしそうなぐらいに舞い上がっていたのだ。

普段から強さを鼻に掛け、調子に乗っていた風見(かざみ)が負けた。きっと、学園中で風見(かざみ)は嘲

笑われており、彼を慕う女子生徒は幻滅し、美しく素晴らしい自分の来訪を今か今かと待ち望んでいる。そんな根も葉もない想像……というより、妄想を思い浮かべていたキースだったが、当然のごとくその妄想はあっさりと裏切られる。
確かに、バトルロイヤルでの敗北は学園中に知れ渡っていた。ほとんどの生徒が戦いを観戦していたのだから当然だ。
だが、キースの予想とは裏腹に、俊介を賞賛するものこそあれ、嘲笑う者など一人としていなかったのだ。当然のごとく、キースの下駄箱にラブレターが入っていると言う事はなく、少し目をそらせば俊介の下駄箱に溢れかえらんばかりの便箋が入っていた。
「どういうことなんだ、これは?!」
叫ぶキースの声に答える者などいるはずもない。納得いかない物を抱えながら、教室へと足を運ぶと、気を取り直して見知った女子生徒に声を掛ける事にする。
「やあ、おはようアイクン。今日もいい天気だね。絶好のデート日和だとは思わないかい? どうだい、今日の放課後ボクと甘い一時を過ごしてみる気はないかな?」
「はあ……」
声を掛けた少女は藤原アイといい、長い金色の髪と、瑠璃色の瞳が印象的な美少女である。
「ああ……風見様……貴方はどうしてここにいないのですか? 私はこんなにも貴方に恋い焦がれているというのに……」
物憂げにため息をつきながら、縦ロールの髪をいじっているアイの瞳には、キースの姿を捉えてはいない。
「ア、アイクン? その、聞いているかな? ボクは君にデートを申し込んでいるわけだけど?」
「……はあ」
また一つ、今度は呆れたようにため息を吐き、さも面倒だと言わんばかりにゆっくりとアイの目がキースを見た。
「まったくこれっぽっちも申し訳ないと思いもしませんけど、お断りしますわ」
「な、何故?!」
「私の目には風見様しか映りませんの。貴方のような愚劣極まりない、自意識過剰のナルシストなど、お呼びでないですわ。わかったらさっさと消えてくれません事? 貴方の吐いた息で空気が汚れますわ。ああ、風見様……貴方のいない教室はまるで太陽の欠けた世界のように真っ暗ですわ……」
言うだけ言って、アイはまた自分の世界へ没入する。
「ま、まったく、素直じゃないなあ、アイクンは……」
と、負け惜しみを口にして精神の均衡を図りつつ、キースは続いてもう一人の女子生徒に声を掛ける。
「やあ、千里クン。おはよう。今日もいい天気だね。絶好のデート日和だとは――」
「あ、おはよう、キース君。ごめんね、わたし今日も俊ちゃんの看病しないといけないから遊べないの」
「ちょっとお待ちなさい、千里! それは聞き捨てなりませんわ! どうして貴方が風見様の看病をするんですの?!」
「だって、俊ちゃんはわたしのお兄ちゃんだもん。看病するのは当然だよ」

「そんなの認めませんわ！　風見様の看病をするなんて……なんて羨ましい事を！」
「あ、だったら、アイちゃんも家に来て一緒に俊ちゃんの看病する？」
「よ、よろしいんですの?!」
「うん。アイちゃんが来てくれたら、きっと俊ちゃん喜ぶよ」
「そうと決まったら、早速お見舞い品の手配をしなくては！　少し席を外します！」
「いってらっしゃーい」
「……」
アイは教室から走り去り、千里はキースの事などすっかり忘れて席に着いている。
一人取り残され、立ちつくす男子が一人……その名は、愛の貴公子キース・クラウド……

……と、そんなわけで、今現在キースは怒り心頭だというわけであった。
「くっ……世の中間違ってる！　何故風見ばかり……ッ！」
悔しさのあまり歯噛みし始めるキース。そこに、
「やめてください！　人を呼びますよ！」
前方から少し焦ったような女子の声が聞こえてきた。
「なんだよ、オレ達は何もしてねえだろ？」
「そうそう、オレ達はただ単に、アンタとちょっとお茶しようって言ってるだけなんだぜ？　そう言う態度はよくないんじゃねえか？」
「では、まず私の手を離してください」
「だからそんなつれねえこと言うなって。いいじゃん、手ぐらいよ」
「そうだぜ。オレたちゃこれからもっと色んなところを触れ合うんだからさ」
「は、離して！　誰か！　誰かいませんか！」
下卑た男達の声と、せっぱ詰まった女子の声。さすがにここまで来れば、目で見ずとも状況は手に取るように分かる。
キースはふぅと息を吐く。
（これはチャンス……じゃなかった、か弱い女性のピンチだ。愛の貴公子として、見過ごす訳にはいかない！）
ベルトに掛けたレイピアを抜き、声の聞こえてくる前方の曲がり角へと躍り出る。
「やめたまえ、君達！　それ以上の狼藉は、この愛の貴公子、ラァァァァァァァァヴ、プリンスが許さない！」
「あぁ？」
突然乱入してきたキースに目を向ける男二人。その二人に絡まれていた女子が、その隙にキースの方へと駆け寄った。
「お願いします！　助けてください！」
「フッ、お嬢さん。このボクが来たからにはもう大丈夫さ。君はボクの後ろに隠れているといい。何、心配しなくてもすぐ終わるさ。こんなゴロツキ如きでは、ボクの相手になりはしない」
「あぁん？　言ってくれるじゃねえか、この野郎」
「調子こいてんじゃねえよ。何がラブプリンスだ。頭沸いてんじゃねえ？」
「まあ、君達のように礼儀作法もろくに弁えていないようなゴロツキ風情では、ボクの

実力は理解できないか。では、せめて教えてあげよう。女性にはもっと優しく、紳士的に接するべきだ。女性を脅して付き合わせようなど論外だ。……とは言っても、君のその顔では女性が怯えるのも無理はないか」

女子に詰め寄っていた男達の一人、何をトチ狂ったのか顔中にピアスをつけている男を見ながら、フッと嗤った。

「テメエ……いい度胸してんじゃねえか?」

「ちぃーとばっかし痛い目みなけりゃわかんねえみたいだな?」

「フッ……痛い目を見るのは、どっちだろうね?」

「ぬかせっ!」

男二人が拳を振り上げてキースに殴りかかろうとする。何も手に持たず素手で、魔法使いにとって必要不可欠である魔術媒介も持たずに。

「やれやれ……これじゃ弱い者イジメになってしまうな」

腐ってもキースは魔法使いを養成する魔法学園の生徒である。同じ魔法の使える日本人同士とはいえ、そこらのゴロツキとはレベルが違う。

「受けるがいい……美しきボクの必殺技を!」

魔法は魔法使いのイメージによって発現する。その発現のさせ方は人それぞれ千差万別である。また、道具を用いて想像の補助や強化を行い、発現する魔法を強固にする技術もある。その道具のことを魔術媒介と呼び、キースの場合それはいつも腰に下げているレイピアに当たる。

「秘剣! ソニックスラスト!」

媒介であるレイピアに風を纏わせ、振り下ろすことによって解放された風がカマイタチとなって襲いかかる。それがキースの浮かべた想像であり、その想像と同じように組み上げられ、この世界に発現した魔法が男達へと襲いかかる。

「なっ……!? があっ!?」

男達は、キースの放ったカマイタチに対してロクに防御もせず、その身を切り刻まれ、吹き飛ばされる。

「だから言っただろう? これでは弱い者イジメだと。気にしなくていい、別に君達が弱い訳じゃないんだ。ただ……このボクが強すぎた。それだけのことさ……」

前髪を払う仕草をとって、意識を失ったのか起き上がってこない二人を見下ろす。十分に勝ち誇り、倒れた二人を見下ろすことで一人悦に入る。

「これであの男達はしばらく起き上がってこないでしょう。だから、もう心配はいらないよ」

「あ……ありがとうございます。私、こんなこと初めてで、怖くて……本当にありがとうございます」

「ははっ。お礼なんていらないさ。ボクは君の笑顔を守れただけで……――」

少しもったい付けるように間を空けてゆっくりとその女子の方へと振り返って……そして、その瞬間キースの中で時間が止まった。

その女子は、学生服を着ていなければ思わず女性と呼んでしまいそうなぐらい、大人びた美しさを身に纏っていた。愛の貴公子やら、ラブプリンスやらと名乗りつつも、実は女子と接する機会が極端に少ないキースには、真っ向から見つめ合うだけで荷が勝ちすぎるほど、秀麗な女性だった。

肌は透き通るように白く、少し垂れた眦が柔和な印象を与えてくる。もしこの場で少しでも微笑まれたなら、キースは緊張のあまり倒れてしまっただろう。
「あの……どうかなされましたか?」
「あ、いえ、その……」
アイや千里(ちさと)を相手にするときのような口説き文句は一言もでてこない。パクパクと口を動かすだけで、一つとしてまともな言葉にならない。
「もしや、どこかお怪我を? 申し訳ありません、私のために……」
「い、いや、そ、そうじゃない。そうじゃなくて、その……」
極度の緊張のため、思わずその場から逃げ出しそうになる。だが、別の何かがキースをそこにつなぎ止めるように、一歩たりともそこから動く事は出来ない。
「あの……さ、さっきのような輩がまたこないとも限りません。だから、その……よ、よろしければ、ボクがアナタをお送りしましょうか?」
口にしてから、しまった、と思った。
いくら何でも、初めてあった相手に対してこれは行き過ぎだろう。下手をしたら、さっきの男達と同じように見られるかも知れない。
心の中で汗をダラダラと流すキース。だが、
「よろしいのですか?」
相手の返事は、キースにとって全く予想外の物だった。
「親切な方ですのね。私、少し感動してしまいました。初めて会った私に、そこまで気を遣っていただけるなんて……」
「あ、え……そ、その、男として、これぐらいは当然の事ですよ。ははは……」
笑いながら、キースの心臓は痛いほどに高鳴っていた。
今まで感じた事のないその高鳴りの意味を、キースはまだ、知らないのだった。

その後、キースは言葉通りその女子を家まで送ることとなった。
普段の口説き文句は一つとして飛び出してこず、それどころかまともに口を利くことすら叶わず、どこかぎこちなく歩いているうちに、そこに辿り着いた。
「ここが私の家です。どうもご親切にありがとうございました」
礼儀正しく腰を折って頭を下げられる。その前で、キースは言葉を無くして立ちつくしていた。彼女の言う『私の家』を見上げながら。
大きいのだ。とてもデカかったのだ。
左を見ても右を見ても塀が続いており、キースの目の前には門がある。少なくとも、日本の一般家庭に玄関の他に門がある家はない。中もそれに見合うだけの屋敷があるのだろう。遠目ではわからないが、その一部が門の中に見えていた。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「ただいま戻りました」
門の中から黒服をきた、がっしりとした体つきの男性が恭しく女子に向かって頭を下げた後、キースに目を向けた。
「こちらの方は?」
「道中、危ないところを助けてもらいました。そして、親切にも私をここまで送ってい

ただいたのです。くれぐれも失礼のないようにお願いします」
「かしこまりました」
もう一度頭を下げた後、男性はキースと向かい合った。僅かに気圧され、後ずさる。
「お嬢様をここまでお送り頂き、ありがとうございました」
「あ、ぼ、ボクはただ当然の事をしただけだ。そんな、大げさに言われる事じゃ……」
目の前の男性にも、目の前の屋敷にも圧倒され、完全に萎縮しているうちに、一歩、隣を歩いていた彼女が足を踏み出す。
「それでは……名残惜しいですが、ここで」
「あ……」
ゆっくりと屋敷の方に歩いていくその姿を見て、反射的に叫んでいた。
「名前！」
「はい？」
「その……君の、名前は……？」
名前を聞く。たったそれだけの事なのに、キースは自分の顔が熱くなる。考えるより先に口が動いて、繋ぎ止める何かを欲するようにそう訊ねていた。
キースのその問いに、女子は僅かに惚けていたが、すぐに振り返って口を開いた。
「茜澤絵里香と申します。よろしければ、貴方のお名前も教えてはいただけませんか？」
「ぼ、ボクは、キース。キース・クラウド！」
「キースさん……ですね。確かに憶えました。では、キースさん。私はこれで失礼しますね」
最後にもう一度、絵里香とその隣に立つ男性が頭を下げて、ゆっくりと、音を立てて門が閉まる。
「茜澤……絵里香……」
門の向こうに見えなくなった人の名前を、壊れ物を扱うかのように優しく呟きながら、キースは少しの間その場に立ちつくしていたのだった。

＊　＊　＊

「……お嬢様」
門が閉まり、キースの姿が見えなくなってすぐ、隣を歩く誠一郎が口を開いた。その目が絵里香を責めるように見ていた。
「なんですか、伊集院さん？」
「柏木はどうしましたか？　お嬢様を迎えに行ったはずですが？」
「柏木さんなら、まだきっと学園の正門前で待っていますね。すいませんが、帰ってくるように連絡をお願いします」
「そういうことを言っているのではありません。何故お一人で帰ってこられたのかと聞いているのです。わかっているのですか？　お嬢様は――」
「少し、歩きたい気分だったのです」
「お嬢様」
誠一郎の声が少し固くなる。
「……わかっています、伊集院さん。わがままはこれ一度きりです。ですから、今回は見

逃していただけませんか？」
「……わかりました」
「ありがとう、伊集院さん」
そう言って、浮かんだ絵里香の笑みは、
キースに向けたそれよりも、どこか……少しだけ寂しそうだった。

第一章　魔法使いの恋物語

「……ん」

ジリリリリッという目覚ましの騒ぐ音が、眠っていた少年をゆっくりと覚醒させていく。

「ふわああ……」

目をこすりながら体を起こし、体を大きく伸ばしてから少年は目覚まし時計を止めた。そして、欠伸をもう一つしながら、何度か右手を握り、開くという動作を繰り返した。

「今日で三日目だよな……」

少年は自分の手のひらに小さな太陽を作るイメージを浮かべる。すると、次の瞬間には少年が想像したとおり、手のひらの上で飴玉と同じぐらいの球体が出現し、眩しいほどに光り輝いていた。

「よしっ！　ちゃんと戻ったみたいだな」

思わず握り拳を作ってガッツポーズを取る少年の名は風見俊介。先日のバトルロイヤルで力を出し尽くした結果、昨日まで魔法が使えなくなるほどに疲弊していたのだ。その俊介が今、三日間の休養を終えて魔法を使えるようになったところであった。

「おはよう、俊ちゃん。って、わわっ、眩しい?!」

「ん？　おお、千里か。おはよう。見ろよこれ、やっと魔力が戻ってきたみたいだぜ」

俊介を起こしに来たのだろう千里に誇るように右手を向けるものの、千里はそれを見ることもなく目をそらした。

「もう、眩しいよ俊ちゃん。早く消してよ」

「なんだよ、折角魔法が使えるようになったってのによ……」

つれない千里の返事を聞いて、しぶしぶと魔法を消す。部屋はカーテンの隙間から差し込んでくる朝日だけで照らされることになる。

「嬉しいのはわかったけど、早く着替えて準備しないと遅刻しちゃうよ?」

「わかってるよ。けどもうちょっとこう、色々あるだろ？　なんていうか――」

「わかったから、早く準備して降りてきてよ。お母さんが朝ご飯の用意して待ってるから」

「へーい……」

言うだけ言って、千里はさっさと部屋を出て行ってしまう。

俊介は少々気落ちしながら上下共に白い学生服を着るのだった。

「風見様！　お逢いしとうございましたわ！」

教室に入るなり、勢いよく俊介に抱きついてきたのは言わずもがな、アイだった。

「ああ……風見様。本物の風見様ですわ。この三日間、一度も風見様に会う事もできず、私は……私はとても寂しかったですわ……」

「昨日も一昨日もその前も、オレが学校休んでた間毎日家に来てただろ！　っていうか、離れろ!」

「きゃあっ。もう、風見様は照れ屋さんですわね」

「照れてねえよ!」

乱暴に振り払われてもなお、アイはくじけることなく俊介の側に寄っていく。

「はっはっは、今日も熱々だな、お前達は。なあ、義弟よ」
「オレがいつからお前の弟になったんだよ、レイ！」
続いて現れたのは、藤原レイ。アイの兄にあたる男子だった。
魔法使いとしての実力は学年で俊介に次ぐＮＯ．２で、俊介と違って学力にも秀でているのだが、それよりもむしろ奇人変人っぷりで有名な男子である。
「心配するな、時間の問題だ」
「何年経ってもオレがお前の弟になることなんてねえよ！」
「大丈夫だ。ちゃんと婚姻届も用意してある。後はお前の名前と印鑑があればそれでいい」
「全然よくねえよ！　つーか、オレ達はまだ学生だぞ！」
「ふむ。つまり卒業すれば問題ないわけだな。わかった、明日が俺達の卒業式だ」
「ふざけんな！」
と、そんな調子でいつものボケとツッコミが展開される事となる。
騒がしい事この上ないのだが、クラスメイトにとっては日常の光景なので特に注目することなく、何名かは久しぶりにやってきた俊介に声をかけて来ていた。
話題に上るのはやはりバトルロイヤルの一件で。みんな口々に惜しかったとか、凄かったとか、体は大丈夫なのか等々と、優しい言葉が掛けられた。
「この人だかりは……ああ、風見が来ていたのか。三日ぶりだな」
「お？　おお、健一か。おはよう」
俊介に声を掛けてきたのは、レイと同じく俊介と仲のいい中田健一という男子生徒だ。アイやレイやキースと言った、個性溢れる知り合いばかりの俊介にとって、唯一普通と呼べる友人だった。
「ああ、おはよう。元気そうで何よりだ。体の方は問題ないのか？」
「おうよ。もう魔法だって使えるようになったからな」
「あ、駄目だよ、俊ちゃん。お母さんから実技の授業はでちゃ駄目だって言われてるんだから」
「はあ？　なんだよそれ、オレそんな話聞いてないぞ?!」
「俊ちゃんが朝ご飯食べるのに夢中だったからだよ。お母さん、ちゃんと言ってたんだからね。絶対に駄目だよ」
「ちょっ、待ってくれよ。もう三日もサボってたんだぜ？　遅れた分は取り戻さないとだな――」
「駄目なものは駄目なの。言う事聞かないと、お母さんに報告して晩ご飯抜きにしてもらうからね？」
「ガキみたいな罰ゲームだな、オイ！」
とはいえ、成長期まっただ中の俊介にとって、一食抜かれるというのは地味に厳しい罰ゲームだ。
「クソッ、わかったよ……見学してりゃいいんだろ、見学してりゃ。はあ……これじゃ何しに学校に来たのかわかんねえよ……」
「たまには真面目に授業を聞くという気はないのか？」
「あるわけねえだろ、んなもん」
「まあ、風見らしいと言えばらしいか。それより、久しぶりに付き合ってもらおうか」
「ん？　……ああ、占いな。いいよ、勝手にやってくれ」

「ではそうさせてもらおう」
健一は趣味で魔法を使った占いをやっている。使うのは大アルカナのカード22枚で、魔法の力で対象の未来に最も近いカードをはじき出すというものだった。健一の手によってばらまかれたカードが、地面に落ちることなく健一の周囲を回転し、その中から一枚のカードが弾き出される。
「出たぞ。……ふむ、正位置の『隠者』か。意味は助言……いや、風見の場合なら協力の方が正しいか」
「協力？　って、何にだよ？」
「さてな。それが分かるというのなら、未来が見えるというのも同じ事だ。まあ、当たるも八卦当たらぬも八卦だ。深く気にするな」
「もともと占いなんざ信じてねえよ。けどまあ、なんだかんだで健一の占いは結構当たるからな……」
当たったところで、別段悪い結果ではない……のだが、もし万が一、レイに何かしらの協力をさせられる、と思うとため息を吐きたい気分になる。
「そう言えばシュンよ。お前が休んでいる間の話なのだがな、毎日のように煉道先輩がお前の姿を探しにやってきていたぞ」
「煉道って……ああ、あの」
これまたつい先日の話になるのだが、バトルロイヤルが行われる少し前に、俊介に宣戦布告をするためにやってきた三年の先輩がいたのだ。-
「なんだってあいつが？」
「先輩に向かってあいつってのは、口の利き方がなってないんじゃないかい？」
その先輩というのは、今俊介の真後ろに立ち、真紅の瞳で俊介を見ている煉道紅音その人である。
「あ、おはようございます、煉道先輩」
「おはよう、千里。んで、ほらアンタは？　先輩に対する挨拶は？」
「いきなり現れて、何いきなり挨拶要求してんだよ。してほしけりゃ、まずそっちからするのが礼儀じゃねえの？」
「アタシはアンタの先輩だよ？　アンタがまず敬意を持って挨拶するのが筋ってものじゃないのかい？」
「オレはアンタに敬意なんて持っちゃいねえっつーの。大体、この前オレに負けたくせに何でそんなに偉そうなんだよ？」
「はあ？　何言ってんの？　この前のはちょっと油断してただけで、本気でやったらアンタなんかに負けるわけないって」
「ああ？　そっちこそ何言ってんだよ。完膚無きまでにぶっ潰してやったのをもう忘れちまったのかよ？」
「あん時は正人がアンタと戦いたそうにしてたから、わざと負けてあげたんだよ。そんなのもわかんなかったわけ？」
「負け惜しみいってんじゃねえよ！　だったら今ここで、決着つけてやろうか？」
「上等じゃない。相手になってあげるから、掛かってきな」
何故か会ってそうそう喧嘩腰になる二人。クラスメイト達はちゃっかりと二人から離れて観戦モードで止める様子はない。

まさに一触即発という状況で、
「まったく……何しに来たんだ、君は……」
「駄目だよ、俊ちゃん。戦っちゃ駄目だって言ったでしょ」
千里と、それからいつの間に来ていたのか、三年の西風正人の声が二人の気勢を削ぐ。
「正人？　なんでアンタがここにいんの？」
「どうせこうなると思ったから止めに来たんだよ……それに、僕も風見君と話をしておきたかったからね」
そう言って、正人は俊介の方に向き直る。一見すると単なる優男にしか見えない正人だが、この学園創設以来の天才と呼ばれている実力者であり、俊介が三日間休養を取る一因でもあった。
「何か用っすか、西風先輩？」
「おっと、また随分と素っ気ないね。それはともかく、用というのは他でもないよ。この前のバトルロイヤルのことなんだけど」
事実上学園ＮＯ．１の称号を掛けて戦った二人。結果として、勝ったのは正人で負けたのは俊介だった。
「あの時も言ったけど、あの戦いは僕にとって有利すぎたからね。僕はあんなもので満足してないんだ。だから、今度僕と対等の条件で、本気で勝負しよう。今日は、それだけ君に伝えたくてね」
優しげな笑みを浮ぶ。だが、その瞳の奥には煮えたぎるような闘争心が見え隠れしている。俊介も大概だが、正人もまた戦闘狂の気があるのかもしれない。
何にせよ、俊介がこんな申し出を断るはずもない。不敵な笑みを浮かべて言う。
「いいのかよ？　その時はオレがアンタから学園ＮＯ．１の地位を奪う事になるぜ？」
「ふふっ。それぐらいの覇気がないとね。君との再戦、楽しみにしてるよ」
「って、ちょっと！　アタシを置いて話すすめんな！　アタシだってアンタに借りを返しておきたいんだから！」
「うっせえな……アンタとは決着着いただろ」
「だから――って、ちょっと！　正人！　離しなさいよ！」
「それじゃ、紅音は僕が責任持って連れて帰るから。騒がせて悪かったね」
「コラーーーーーーーッ!!　正人ーーーーーーーーーーーっ!!」
文句を言いながら暴れる紅音を片手で引きずりながら、正人はそのまま教室を出て行こうとして、
「それじゃあね、千里君」
「あ、はい。さよなら、西風先輩」
最後に千里に声を掛けてから、今度こそ教室を後にしたのだった。
……少しだけ嬉しそうな顔をした千里を見て、何故だか少し面白くない気分になる俊介だった。
「うむうむ。何やら面白い具合にこじれそうで、端から見ている分には愉快だな。なあ、中田？」
「俺に同意を求めるな」
「何だつまらん。お前ぐらいの年頃なら、他人の恋物語は娯楽の一つだろう？」
「俺ぐらいも何も、お前も同い年だろう」

「だから俺はキチンと楽しんでいるだろう?」
悪びれずに言ったレイの隣でため息を吐く健一。
更にその隣では、
「あの女……まさかとは思いますが、風見様に気があるわけではないでしょうね? いえ、そんなはずはないですわ。あれが風見様の素晴らしさを理解する事なんてないに決まってますわ。それに、気づいたとしても風見様の愛はもう私のものですわ」
アイが何やらぶつぶつと呟いている。
騒がしくも、普段通りの毎日。嵐の過ぎ去った教室は、何事もなかったかのように朝の喧噪を取り戻し、個人個人好き勝手に話を繰り広げている。
……のだが、
「なんつーか、こう。何か足りなくねえか?」
三日ぶりに来た教室で、三日前と変わらないメンバーで、三日前とそう変わらないやりとりをしているはずなのに、ふと何故か俊介はそんな事を思った。
そう、いつもならこうやって話をしていると必ず割って入ってくる馬鹿がいるのだが……
「そうか。なんか静かだと思ったら、あの馬鹿がいないのか。休みか?」
「何だ、シュン。キースの事が気になるのか? つまりあれだな、近くにいるときは気づかなかったが、離れて見るとふと気づく恋心という奴だな?」
「んなわけあるか!」
「そんな! 風見様! 私というものがありながら、どうしてよりによってあんなナルシストに心奪われたというのですか! 男同士だなんて……不毛ですわ!」
「お前ら一度黙れ!」
「あのね、アイちゃん。世の中には、ボーイズラブって言うのがあってね」
「誰だ! 千里に変な知識植え付けたやつ!」
「え? 変なの? 女の子の必須知識だって藤原君が……」
「テメエかこの野郎! 表に出やがれ!」
「ん? なんだ、キースの次は俺か? まいったな……俺にも心の準備というものが」
「いっぺん死ね! っていうか、殺す!」
ワナワナと震える手で拳を作って、振り上げたところで「まあ待て、軽い冗談だ」というレイの静止の声が入った。
「ったく……んで、あいつはどうしたんだよ?」
「どうしたも何も、あれを見ろ」
レイが指さしたのはキースの席と、そこに座っているキースの姿だった。
「なんだ、来てたのかよ。のわりには、えらくおとなしいな」
もはや反射的と言ってもいいぐらいに、俊介にちょっかいを掛けてくるキースが、今日は席に座ったまま動く様子すら見せない。動きらしい動きと言えば、時折ため息を吐くぐらいだった。
「昨日と一昨日それに今日と、ずっとあの調子だ」
横から健一が補足する。
「はーん……風邪でも引いたか?」
「そういう類の物ではないと思うが……」
「恐らく、お医者さんでも草津の湯でも治せないと評判の病だろうな」

「んなの、あいつにとっちゃいつもの事だろ？」
「いや、案外――」
レイは面白そうに笑って、
「――本気の恋と言う奴かもしれないぞ？」

俊介にとって、楽しかった時間はそこまでだった。
担任がやってきて、ＨＲに始まり一時間ずつ授業が行われるわけだが、俊介にとって普通の授業ほど苦になるものはない。数字が並ぶだけどころか、文字が並ぶだけで眠くなるのが風見俊介という人間なのだ。
魔法に関する授業にしても同じ。俊介にとって、この学園で眠くならない授業と言えば実技か体育ぐらいである。しかし、残念な事に俊介は実技の授業に出る事を禁じられている。これでは何のために学校に来ているのか分からない。
半ば拷問のような時間が過ぎていき、やっと授業が終わり、放課後がやって来る頃にはすっかりまいってしまっていたのだった。
「う～……くそっ、こんなことならまだ学校休んでればよかったぜ……」
机に突っ伏しながら愚痴る。
「お疲れ様、俊ちゃん。久しぶりの学校はどうだった？」
「退屈すぎて死ぬかと思ったぜ……」
「あはは。後はもう帰るだけだから、もう少し頑張ろうね」
「へいへい……――」
「お兄様！　どこに行かれるのですか！」
気の抜けた声でおざなりに返事をしながら、鞄を持って立ち上がる俊介の耳に、アイの声が聞こえてくる。珍しくまとわりついてこないと思ったら、アイはレイの手を取って何やら詰め寄っていた。
「どこも何も、学校が終われば家に帰るのはごく普通のことだろう？」
「今日はお姉様のお宅へお伺いすると、今朝言ったはずですわ！　お姉様もお待ちしているはずですわ！」
「予定などその時々によって変わるものだ。しかし、心配するな。もし運命というものが存在するならば、いつの日かきっと俺が彼女の家を訪問することになるかもしれないな」
「そんな意味不明な事を言っても、駄目ですわ！　今日という今日はお兄様にはお姉様に会っていただきますわ！」
「まいったな……」
アイがレイに詰め寄っている光景も珍しいが、レイの困ったような表情はもっと珍しい。ちょっとした見せ物を見る気分で二人を眺めていた俊介と、レイの目があった。
「おい、千里！　帰るぞ！」
「え？　え？」
瞬間、ヤバイと感じた俊介は慌てて逃走を図るが、
「おやおや、そんなに慌ててどこに行くんだ、マイフレンド？」
しかしまわりこまれてしまった。
「ぐっ……か、帰るんだよ？　何か文句あるのか？」

「ほう、つまりお前は窮地に立たされた友人を見捨てて帰るという訳か。ん？　何？　そこまで言われたら黙ってられない。オレが力になるから何でも言ってくれ？　いやしかし……ふむ、まあお前がそう言ってくれるなら話てみよう」
「何一人芝居やってんだよ！　オレは帰るっつってんだろ！」
「実はだな、今日とあるお宅に訪問する事になっているのだが」
「聞けよ！」
「俺はあまりそこに行きたくない。というわけで、代わりにお前が行ってくれ」
「どういうわけだよ！　ってか、どんな訳があったって行きたくねえよ！」
「ほう、これを見てもそんなことが言えるのか？」
すっと、俊介（しゅんすけ）の前に二丁のリボルバーが差し出される。俊介（しゅんすけ）の魔術媒介、その名も流星と逆月（シューティングスター リバースムーン）である。
「なっ？　なんでお前が持ってんだよ?!」
慌てて自分のベルトに結わえ付けられたホルダーを探るが、そこに相棒とも言える二丁の銃の重さはなかった。
「……むしろ、今まで気づいてなかった事が驚きなんだが。仮にも魔法使いが、自分の魔術媒介がないことに気づかないとはどういうことだ？」
「う、うっせえな。今日は実技の授業に参加してないんだから仕方ないだろ！」
「そういう問題ではないような気がするが、まあいい。重要なのは今その銃が俺の手元にあるということだ。断っておくが、もちろん盗んだわけではないぞ。俺はただこの銃のメンテナンスをしただけだ」
「メンテナンス？」
「そうだ。バトルロイヤルであれだけ酷使したわけだからな。どこか調子がおかしくなっているかもしれんと思い、気を利かせてやったわけだ。善意１００％でだ」
「嘘くせえ……」
確かに藤原（ふじわら）レイという男は悪人ではない。だが果たして善人かと問われれば首を捻るところだ。言動のことごとくが戯言だという人間の言葉を、一体どうして信用できるというのか。
「まあ多分に私情が入っていた事は認めんわけではないが、俺がこの銃のメンテナンスをしたこともまた事実だ。どうせお前の事だ、渡してから今まで一度もした事がなかったのだろう？」
「ま、まあ、そりゃありがたいけどよ……つまり何が言いたいんだよ？」
「聞かずとも分かるだろう？」
ようするに、メンテナンスしてやったお礼に今日俺の代わりにアイと一緒にどこぞのお宅に訪問しろ、ということなのだろう。
「……断ったら？」
「特に何もない。ただ……無償でメンテナンスをしてくれた心優しい友人が困っていながら、シュンはそれをあっさりと見捨てて帰る事の出来る人間なのか……俺達の友情はその程度のものだったのか、と思うだけだ」
「またわざわざムカツク言い回ししやがって……」
何が無償だ、と心の中で怒鳴りながら、俊介（しゅんすけ）は渋々頷いた。
「わーったよ、なんだかよくわかんねえけど行けばいいんだろ、行けば。つーか、オレが

行っても大丈夫なのかよ?」
「問題ない。これは単なるアイのお節介だからな」
「というかそもそもアイが納得するのか?」
「本人に聞いてみればいいだろう? アイよ、俺と行くのと、シュンと行くの。どっちがいい?」
「風見様ですわ!」
即答だった。
「そこまであっさり断言されると少し寂しいものがあるわけだが、まあいい。とにかくそう言うわけだから、ちょっと行ってきてくれ。何、ちょっと話をするだけで終わるだろうから心配ない」
「だったらお前が行けばいいだろ……」
「まあそう言うな。俺にも色々とあるのだよ、色々とな」
「そうかよ。ったく……」
諦めたようにため息を一つ吐く。
「えーっと……じゃあ、わたしは一人で帰るのかな?」
「ん? まあ、風見嬢が一緒でも問題ないだろう。むしろ、シュン一人を送るよりもいいかもしれんな。むしろ行ってくれるとありがたい」
「そうなんだ。それじゃあ、わたしも行くね、俊ちゃん」
「……折角風見様と二人きりになれると思いましたのに」
少し残念そうに言うものの、アイはそれ以上文句を言う事はなかった。
「では、行きましょうか。風見様。千里」
「で、結局どこ行くんだよ……」
「楽しみだね、俊ちゃん」
「俺は不安の方がデケえよ……」

＊　＊　＊

「さて、行ったか」
アイにつれられて教室を出て行った三人を見送ったレイが独りごち、珍しく安堵の息を吐いていた。
「珍しい事だな。お前がそこまであからさまに安心するとは」
「中田か。まあそう言うな。俺にも色々とあるのだよ、色々とな」
「そうか。まあ、お前なら確かに色々あってもおかしくはないな」
訳知り顔で語る健一に、しかしレイは何も言わない。
少し前に、健一はレイの事を〝レオナルド〟と呼んだ。その名を知っている以上、健一は少なくともレイの立場というものを理解しているはずなのだ。
「しかし、どうして風見を行かせたんだ?」
「それは単にアイの興味をシュン一人に向けさせたかっただけだ。後は、兄なりの援護射撃と行ったところだな」
「さっきの様子を見るに、それぐらいでお前を見逃してくれるようには見えなかったのだがな」

「何の事はない、アイは兄思いの妹だと、それだけの話だ」
「……ますます意味が分からないな」
自分の正体すら知り、なおかつレイがその秘密を探れない相手に、首を傾げ悩ませる事が出来た事に心の中で笑う。
「まあそれはいいか。それはともかく、風見の魔術媒介のメンテナンスをしたそうだな？　……いや、本当にメンテナンスだったのかは怪しいが」
「失礼な。メンテナンスは完璧にしたぞ。ただまあ、少々調べたい事があったのもまた事実だがな」
「調べたい事？」
「前にも言ったが、流星と逆月の変形機構は俺にも何がどうなっているのかサッパリだからな。もともと生態金属自体偶然の産物のようなものであったし、一度入念に調べてみようと思ったわけだが……」
肩をすくめてお手上げのポーズを取る。
「収穫はゼロだ。シュンがいなければ本来の姿も解放できなくてな。残念だが、俺には二度とあれと同じものは作れないだろうな」
「そんな不確かな物を風見に使わせているのか？」
「だが、結果は上々だろう？」
先日のバトルロイヤルにしても、千里を救出する際にも、あの二丁の銃は大きな力を発揮した。俊介の実力を低く見るわけではないが、それでもあの武器がなければ俊介はそのどちらも勝ち抜く事はできなかっただろう。
「結果良ければ全てよしだ。過程など問題ではないのだよ」
「まあ、一理あるわけだが……」
納得できないと言わんばかりの顔をしている健一を置いて、レイもまた鞄を手に取り教室を後にしようとする。
「ではな。俺も帰ってやらなければならないことがあるので、これで失礼させてもらおう」
去っていくレイの背中に健一が声を掛けて来るでもなく、レイはそのまま帰路へと着く事になるのだった。

＊　＊　＊

「んで？　結局オレ達はどこに連れて行かされるんだ？」
学園を出て、普段通らない道を歩きながら、先導するアイに訊ねる。
「お姉様の所ですわ」
「誰だよお姉様って……」
「お兄様の婚約者ですの」
「ふーん……レイの婚約者ねえ……って、婚約者!?」
思わず聞き流してしまいそうになった聞き慣れない単語に驚く。
「なんだ？　あいつ結婚するのか……？」
「そうなんだ。わたし達もお祝いに行かないとね、俊ちゃん」
「いやそういう問題か？　普通……いや、やっぱなんでもねえ」
途中まで言いかけた言葉を止める。幼少時代に誘拐されたため、千里には基本的な常識

という物が少しばかり足りていない。そのため、俊介達の年で結婚という単語を聞いても、別段不思議には聞こえないのだろう。
「……まあ、前からなんか金持ちっぽい言動とかあったからな……婚約者とか許嫁とか、そんなのがいてもおかしくはない……のか？」
「そう言うものなの？　じゃあ、アイちゃんにもいたりするのかな？」
「心配なさらなくても、私は風見様一筋ですわ」
「いや、別にそんな心配は全然してねえよ。しっかしなあ……」
口に出していって見たものの、やはり婚約者だとか許嫁なんて話は、庶民の俊介からしてみれば縁のない物で、はっきり言って現実感に乏しかった。彼女と紹介されればそれはまあ驚くだろうが、納得は出来ただろうが。
「つーか、それなら尚更レイの奴が来るべきだろ？　何でオレ達が行くはめになるんだよ？」
「……お兄様の事ですから、色々と考える事があるんだと思いますわ。お兄様は、自由を愛される方ですから」
「あー、結婚したら自由がなくなるとか、そんな話か？」
「そう言うわけではないのですけど……」
レイに詰め寄っていたわりには、アイの表情は複雑に見えた。レイの気持ちもわかると言いたげに見える。
それからしばらく無言の時間が続いて、
「着きましたわ。ここがお姉様のお屋敷ですの」
「ちょ……ここが?!」
眼前の建物を見て言葉を無くした。
大きいのだ。デカイのだ。どのぐらいかと言えば、左を見ても右を見ても塀が続いており、俊介の眼前には立派な面構えの門が立ちふさがっているのだ。基本的に、日本の一般家屋に門などと言う上等な物は付いていない。
その塀と門がハッタリでなければ、中の屋敷は一体どれほど物というのか、一般庶民に過ぎない俊介には全く想像が付かない。
「ふえー……おっきなお家だね」
「オレんちの何倍あるんだろうな……」
庶民丸出しの二人を置いて、アイは「ごめんください」と門を叩いた。少しして、ゆっくりと門が開き、黒服を着たガタイのいい男が現れ、深々とアイに向かって頭を下げた。
「ようこそいらっしゃいました、アメリア様。お嬢様が中でお待ちです。どうぞこちらに」
「わかりましたわ。けれど、伊集院さん。間違えてもらっては困りますわ。私の名前は藤原アイと申しますの」
言って、アイがチラリと俊介達を一瞥する。同じように黒服の男性の目が俊介達に向けられる。
（……結構、できるな。こんな屋敷にこんな格好でいるぐらいなんだから当たり前か……）
一目見てそう思った。恐らく、この男性は屋敷に仕えるボディーガードか何かなのだろう。
「アイ様。こちらの方々は？」
「私のクラスメイトですの。お兄様は今日来られないので、その代わりですわ。いけま

せんか？」
「いえ、アイ様のご学友であるのなら」
「そう言っていただけて嬉しいですわ。では、風見様、千里。まいりましょう。お姉様はこの中ですわ」
堂々と門をくぐって敷地内へと足を踏み入れていくアイの姿は、いつも教室で見る子供っぽいそれと違って、どこか大人びた、あるいは俊介達よりも社交的な人間に見えた。
「俊ちゃん。わたし達も入ろうよ。お邪魔しまーす」
「お、おお……お邪魔します」
圧倒的な存在感を放つ屋敷と、毛色の違うアイの様子に驚きながら、俊介もまた屋敷の中へと足を踏み入れた。
門の入り口から屋敷の玄関までは石畳が敷かれており、ふと脇を見てみれば玉砂利がまかれ、木々の植えられた立派な庭が見える。時折、カコーンというししおどしの音も聞こえてきた。
「なんつーか……本物だよな……」
「？　何が？」
「いや、別に……」
全く萎縮していない千里を羨ましく思いながら、歩き慣れない他所様の庭を歩き、屋敷へと上がり込む。長い廊下を歩き、階段を上った先にある戸の前でアイは一度足を止め、ゆっくりとその戸を開けた。
「失礼しますわ、お姉様」
アイに続いて、「失礼します」と入っていく千里。その後を、居心地悪そうに俊介が付いて入った。
「いらっしゃい、アメリア。それと……」
い草の匂いの香る畳部屋の真ん中。柔和な笑みを携え、和服に身を包んだ女性がいた。
「そちらの方は？　アメリアのご学友の方ですか？」
優しく垂れ下がった目が俊介と千里に向けられる。
「あ、えっと……」
その女性は、同学年の女子とは違う、可愛いではなく綺麗という表現の似合う大人びた女性だった。それも、普段あまりそう言ったことを気にしない俊介が思わず息を呑んでしまう程に。
そんな俊介の様子を見て取った……というわけでもなく、アイは二人の前に出て言う。
「こちらが、私のクラスメイトである風見千里ですわ」
「初めまして。風見千里です。こんにちは」
「こんにちは。随分と可愛らしいお嬢さんですね。どうぞアメリアと仲良くしてあげてくださいね」
「アメリア？」
聞き慣れない名前に千里が首を傾げる。それを訊ねるより先に、アイが口を開く。
「お姉様。私の名前は藤原アイと言いますの」
「あら、そうでしたの？　それはごめんなさい」
「なあおい、アメリアって……」
「それで、こちらが風見俊介様ですわ。千里のお兄様で、私の未来の夫となるお方です

の」
「ってちょっと待て！　何勝手な事言ってんだよ！」
「まあ、それはおめでたいことですね。風見さん、アイの事をどうぞよろしくお願いします」
「だから違うって！　オレとこいつはただのクラスメイト！　それ以上でもそれ以下でもねえよ！」
「もう……風見様ったら。お姉様の前だからって照れなくてもいいんですわよ？」
「照れてねえよ！」
ついさっきまで感じていた緊張はどこへ行ってしまったのか。すっかりいつもの調子を取り戻した俊介が、アイにツッコミを入れる。
その様子を、その女性は優しげな笑みを浮かべながら見ていた。
「アイ」
「何ですか、お姉様？」
「学校は楽しいですか？」
「もちろんですわ。風見様がいて、お兄様がいて、楽しくないはずがないですの」
「そう……よかった。本当ならあなたもカトレア女学院に来るはずだったのに、突然の転校、それも一つ上の学年になんて無茶をするから、心配していたのよ？　それに、アイは……」
「……私に魔力がない事は、二人とも知ってますわ。それでも、私をクラスメイトと認めてくださるんですの。これほど嬉しい事はありませんわ」
「そう……風見さん。千里さん。ありがとうございます。これからも、どうぞアイと仲良くしてあげてくださいね」
畳の上に正座をしたまま、深々と頭を下げた女性を前に、俊介は一人、情けなくも戸惑ってしまう。
一体何に対して礼を言われているのかさっぱりわからないのだ。
しかし逆にそれは当然の事だった。なぜなら、俊介にとって、魔力の有無など関係なく、アイをクラスメイトと思う事は当たり前すぎる事なのだから。
そんな俊介の様子を、アイと千里が優しく見つめていた。
「そう言えば、私の自己紹介がまだでしたね。遅くなって申し訳ありません。私の名前は茜澤絵里香と申します。以後よろしくお願いしますね」
そう言って、また一つお辞儀をする。こんな屋敷のお嬢様だけあって、礼儀作法もしっかり躾られているのだろう。
「失礼します。お嬢様。お茶が入りました」
戸が開いて、一人の少年がお盆の上に四つのティーカップをのせてやって来る。
「ありがとう、正喜。皆さん、どうぞこちらにお座りください」
絵里香が一度立ち上がって、テーブルの方へと移動する。それに倣って俊介達もテーブル近くに腰を下ろした。それぞれの前に、少年がティーカップを置いていき、全員分の用意が終わると、少年は一度頭を下げた後部屋を出て行った。
その後、しばし歓談が続いた。とはいっても、盛り上がっているのは女子三人だけで、俊介はあまり会話に参加できず、飲み慣れない紅茶の苦みに眉を顰めつつ、ただボーッと三人の話を聞いているだけだった。

「ところで、アイ？　レオ……あなたのお兄様は……」
「……申し訳ありません、お姉様。レイお兄様には逃げられてしまいました」
今度はアイが頭を下げる番だった。それを見て絵里香は、「そうですか……」と小さな声で言った。
「頭を上げて、アイ。あの方の事は、私もよく知っています。決して、悪意があるわけではないことぐらい、わかっています」
「ですけど……婚約関係にあるお姉様にこんなにも寂しい思いをさせるなんて……やはり、無理にでもお兄様を連れてくるべきでしたわ」
「いいのよ、アイ。あの方にはあの方の考えがあるのでしょうから」
「それでも、やはりお姉様に対して不義理かと……」
「本当にいいの。それに、不義理だというのならそれはきっと私の方だわ」
「お姉様？」
「実はね、アイ。私……少し気になる方がいるの」
僅かに頬を朱く染めながら、何かを恥じるように目をそらす絵里香。
「気になる方……？　一体誰の事ですの、お姉様？」
「昨日……帰り道で悪漢に襲われていた私を助けてくださった殿方がいらっしゃいました。とても紳士的で……その……少しだけ気になってしまって」
すっと絵里香の目が伏せられ、少しの間沈黙が続いた。もしかしたら、口にしたことを恥じているのかも知れない。
「……不義理な事とはわかっているのですが」
「いいえ、お姉様。その気持ちは私にもよく分かりますわ。私もあの時、あの瞬間から風見様の事が忘れられないのですから……」
うっとりと虚空を眺めるアイの目には、恐らく俊介とアイが出会ったときの事が映し出されているのだろう。
「そういうことなら、私お姉様のために一肌でも二肌でも脱ぎますわ！」
「しかし……」
「お兄様の事なら構いませんの！　ずっとお姉様の事をほったらかしにしていたんですもの、自業自得という物ですわ！　ささ、お姉様。私にもどのような方か教えてくださいまし。必ずや私がどこの誰かを突き止めて見せますわ！」
自信満々に言うアイを見て、こうやって自分の事も調べられたのか……などと思う俊介なのだった。
「ってか、何か話がズレてきてるみたいなんだが……オレ達がいる意味はあるのか？」
さっきから完全に置いてけぼりである。千里は楽しそうに話を聞いているが、俊介にとってはそれほど興味を惹かれる事でもなかった。
別段この後何か用があるわけではなかったが、無為な時間を潰すのは俊介にとって苦痛でしかない。
「私は風見様がいてくれるだけで幸せですわ」
「お前の都合なんざ聞いてねえよ。用がないならオレはもう帰るぞ」
「あ、お待ちください」
引き留めたのはアイではなく絵里香の方だった。色の白い綺麗な指が俊介の制服を刺していた。

「その制服ですわ。あの方が着ていたのは」
「制服って、この白ブレザーのことか？　ってことは、そいつうちの学生ってことか」
「ええ……風の魔法をお使いになられていました」
「風なあ……」
魔法には六つの系統がある。
火、水、土、風、光、そして闇だ。もっとも、闇系統に関しては、俊介もついこの間知ったばかりで、一般的には魔法の系統は五系統であるとされているのだが。
どの系統の魔法が使えるか、というのは完全に先天的な才能であり、努力によって増やせる物ではない。例えば俊介は光系統の魔法を使えるが、何をどうあがいたところで火や風の魔法を使う事はできない。もっとも、魔法具を使って擬似的に他系統の魔法を扱う事は可能であるが。
「それだけじゃなんとも言えないな……風使いなんてそれこそうちの学園には何人でも転がってるだろうしな」
「中田君や藤原君も使えるよね。あ、あと、キース君も」
「いや、あいつだけはありえないだろ……」
「ちょ、ちょっとお待ちください！　千里さん、今なんと……？」
「え？　風の魔法は中田君や藤原君も使えるって……あ、あとキース君も」
「キース……？　その方はもしや、キース・クラウドという名前ではありませんか?!」
「……は？」
それまでの落ち着いた素振りを取り払って、身を乗り出して千里に詰め寄るその姿に、俊介だけではなくアイも驚いていた。
ただ一人、
「え？　うん、キース・クラウド君だよ。ねえ、俊ちゃん？」
千里だけはそんな二人に気づかず、マイペースにそう答えていた。
「あの、お姉様……まさかとは思いますが……そのお方は金色の髪で、レイピアを持っていたりはしません……でしたわよね？」
「まさか……アイ。あなたは知っているの？　キース・クラウドさんを!?」
決定的だった。
俊介とアイは互いに顔を見合わせ……
「「えええええええええええええええええええええええええっ!!?!」」
あまりの出来事に驚きを隠せず絶叫し、
「そうなんだ。茜澤さんって、キース君の事が好きなんだね」
やはりただ一人、千里だけがマイペースにそう言っていた。

第二章　二人の初デート

絵里香と出会ってから、キースは熱病にでも冒されたように頭がボーッとしていて、いつものように女子を口説く事すら満足に出来ない毎日を送っていた。

「……はあ」

すっかりため息をつく事にも慣れてしまった。今日も学園で何度ため息をついたのか、そして家に帰ってきてからこれが何度目のため息なのか全くわからなかった。

「会いたいな……彼女に……絵里香さんに……」

絵里香の名前を口にすると、それだけで胸が締め付けられる思いがする。こんなことは初めての体験だった。

大体からして、キースの性格ならそこまで相手に会いたいというなら、会いに行くはずなのだ。直接家を訪ねる事は出来なかったとしても、何気なく家の周りをうろついてチャンスを作るぐらいのことはやってのける男である。

……だが、今のキースはそれを行動に移す素振りは全くと言っていいほどない。

気力がないわけではない。ただ、絵里香に対してそんな姑息な真似をしたくない。あるいは、そんな姑息な事をしている自分の姿を見られたくないと、そう思っていたのだ。

逆に言えば、他の女子が相手ならやってもいいと思っている辺りに、キースが女子から倦厭される理由があるわけだが、本人はそのことに気づいていない。

「本当にどうしたと言うんだ、ボクは……こんな、一人の女性のことばかり考えているだなんて……ボクは、全ての女性を愛する愛の貴公子、ラブプリンスのはずなのに……ああ……こんなことでは、ボクを慕ってくれている女の子達に申し訳がない」

と、一人あまり意味のない懊悩に苛まれるキースの耳に、不意に電話のコール音が聞こえてくる。放っておけば親が取るだろうと思っていたのだが、いつまで経ってもコール音が消える気配はない。出かけてでもいるのだろうか。

「チッ……仕方ないな……」

しつこく鳴り続けるコール音を止めるために、重い体を動かす。

「はい、もしもし」

「その声はキースだな。藤原だが、お前に用がある」

「藤原？　藤原レイか？」

「そうだ。お前のクラスメイトの藤原レイだ」

「何の用だ？　ボクは今君の戯言に付き合ってやれるような状態じゃないんだぞ」

「これはまたつれない返事だな。折角朗報を用意してやったというのに」

「朗報？　またどうせくだらない話だろう。そう言うのはボクじゃなくて風見に言えばいいだろう。もういいな？　切るぞ？」

「ほう、お前は聞かないというのか？　それは残念だな」

大して残念そうでもない声に苛つきながら、そのまま受話器を置こうとして、

「絵里香の方にはもう話を通してしまったんだがな」

その動きがピタリと止まる。

「い、今なんと言った、藤原!?　今、絵里香と……」

「さあ？　俺はそんな事を言ったか？」

「言った！　この耳ではっきり聞いたぞ！　どういうことだ！　どうして君があの人の名

前を知っているんだ?!」
「どうと言う事はない。茜澤絵里香は俺の幼馴染みというだけだ。何か問題があるか?」
「おさな……」
「まあそんな事はどうでもいい。キースよ、絵里香の命が惜しければ明日午前十時に繁華街西入口にやってこい。わかっているとは思うが、くれぐれも警察には連絡せんことだ。もし連絡したならば、人質の命はないと思え」
「は? ちょ、待て藤原! いったい何だそれは! ……クソッ! 切られた!」
叩きつけるように受話器を戻して、レイの言った事を考える。
「何のつもりだ、藤原……」
後半部分の人質云々は冗談だろうが、午前十時に繁華街西入口に来いと言うのはどういうことだろうか。レイがキースを遊びに誘う事などまず考えられない。
「まさか……あの人が……? いや、そんなわけがない。きっと藤原の冗談に決まってる」
もしくは同姓同名の女性を待ち合わせ場所に待機させておくというドッキリでも仕掛けているのか。そんな巫山戯た事、レイならやりかねない。
「ふんっ。誰がそんなものに引っかかるか。何が幼馴染みだ。そんな嘘でこのボクが……」
だがしかし、
もし、本当だったら?
本当に絵里香とレイが本当に幼馴染みで、レイが何を考えているのかはともかく、絵里香に会えるチャンスがあるとしたら。
「……馬鹿馬鹿しい。そんなこと、あるわけがない」
あるわけがない……けど、
「でもまあ、明日は珍しくデートの予定が入ってないじゃないか。仕方ない、一人では少々寂しいが、繁華街に遊びに行くとしようじゃないか、うん」
誰に言うでもない言い訳をしながらキースは、絵里香と初めてあったときのように胸が高鳴っている事実に気づいていた。

＊ ＊ ＊

「ふむ、まあこんなところだな」
「……お兄様。今回ばかりは真面目にやって欲しいと言ったはずですけど?」
「何、心配いらん。キースの事だ、今頃『明日は珍しくデートの予定が入ってないじゃないか。仕方ない、一人では少々寂しいが繁華街に遊びに行くとしようじゃないか、うん』とか言いながら、明日に思いを馳せているだろう。うむ」
「なら、いいのですけど……」
歯切れの悪い言葉。アイは僅かに俯きながら、呟くように訊ねた。
「……これでよろしいんですの?」
「まあ確かにキースはあの性格だからな。お前が絵里香の事を心配する気持ちは分からんでもないが、他でもない絵里香が選んだ――」
「私が言っているのはお兄様の事ですわ。お兄様はお姉様のことを何とも思ってらっしゃらないのですか?」
「絵里香は大切な幼馴染みだ。お前と同じぐらいには大事に思っている」

「でしたら――」
「アイ」
レイは優しい笑みを浮かべながら、アイの頭を撫でる。
「お前は、優しいな」
「……優しいのは、お兄様の方ですわ。こんな私の事を……」
「ああ、愛しているよ、アイ。お前は、俺の大切な妹だ」
「お兄様……」
感極まったようにレイの胸の中にアイが飛び込んでいく。レイは何も言わずに、ただ優しく頭をなで続けていた。その手に、親愛の情を込めるように優しく、優しく。
「俺にとってはな、そんなお前と同じぐらいに絵里香のことも大事に思っているんだ」
「……お姉様だって、きっとそう思っていますわ」
「……そうだな。だが、俺と絵里香では決定的なまでに立場が違う。俺が当たり前に持っている物を、あいつは与えられずに生きてきた。だから、それを知らないまま、絵里香を俺の婚約者にするわけにはいかないんだよ、アイ。わかるだろう?」
「……はい」
「いい子だ」
レイがポンポンと背中を叩くのを合図に、アイはゆっくりと離れていった。
「さてと、では明日の準備をしなければな、アイよ。明日は中々楽しい事になりそうだぞ」
「ええ、もちろんですわ。あの男がお姉様に変な事をしないか、しっかりと監視しないといけませんものね」
悪趣味な笑みを浮かべるレイに言葉を返したアイの顔は、いつもと同じ元気な笑顔が浮かんでいたのだった。
「では、アイ。絵里香の方に連絡を入れておいてくれ」
「わかりましたわ、お兄様」

＊　＊　＊

「本当ですか、アメリア?　キースさんが?」
『ええ、明日午前十時に繁華街の西入口に来るそうですわ。それで、そちらの準備は大丈夫ですの?』
「ええ。大丈夫ですわ。正喜の協力も得られましたし、どうにか」
『そうですか。では、後武運を、お姉様』
「ええ、ありがとう、アメリア」

そして、翌日。
「正喜。準備は出来ましたか?」
「はい。お嬢様。……でも、本当に大丈夫なんですか?　こんな物で……」
正喜は不安げに自分の持った鞄に目を落とす。そこには、レイから届けられた絵里香をキースの元へと行かせるためのある物が入っているのだが……
「大丈夫よ。レオナルド様が作った物なのだから」

「……お嬢様、本当によろしいのですか？　このようなこと、父上も旦那様もお認めになりません。それに、レオナルド様は……」
「その話は昨夜したはずですよ。もう、決めた事なのです」
「わかりました。お嬢様がそうおっしゃるのなら」
「ありがとう、正喜。では、行きましょう」
二人は戸を開けて部屋を出て行く。
今日は休日で、アーレント魔法学園だけでなく、絵里香の通うカトレア女学院も休みである。そのため、絵里香の姿は制服ではなく私服姿である。
「お嬢様。どこかにお出かけですか？」
玄関のところで、絵里香の父である君陽の執事をしている誠一郎が声を掛けてくる。絵里香が生まれてくる前から茜澤家に仕えてきた彼は、君陽の不在時の一切を任される執事長でもあり、また絵里香に仕える執事見習いである正喜の父親でもあった。
「ええ、伊集院さん。少し、図書館に調べ物に。少し荷物がありますから、正喜も一緒に」
「左様でございますか。では、すぐに柏木に車の準備をさせましょう」
「お願いします」
平然を装いながらも、絵里香の心臓はドキドキと鼓動を早くしていた。
物理的な意味で絵里香とキースの障害になる可能性がもっとも高いのが、この誠一郎なのだ。もしデートの事が知られようものなら、ここで引き留められ、部屋の中に閉じこめられてもおかしくない。少なくとも、誠一郎にはそれだけの権限があるのだ。
今のところ、誠一郎に気取られた素振りはない。
車が車での僅かな時間に焦れていた絵里香は、やって来た車に乗り込んだ瞬間小さく息を吐いた。無論、ここでボロを出せば柏木から誠一郎の方に連絡が行くかもしれないので、普段通りの振る舞いを心掛ける。
極度の緊張と、忠臣を騙す自分に心労をためながら、車はようやく図書館へと辿り着いた。
「ありがとう、柏木さん。少しばかり時間が掛かるかも知れませんから、帰っていただいても結構です。帰りはまた連絡しますので」
「いえ、私はここでお嬢様のお帰りをお待ちさせていただきます」
「そうですか。では、すみませんがお願いしますね」
「はい」
心の中で「ごめんなさい」と謝ってから、柏木に背を向けて図書館の中へと入っていく。
「では、正喜。少しここで待っていてください」
物音一つ立てることすら躊躇うような静寂の包む館内に足を踏み入れてすぐ、絵里香は正喜に持たせていた鞄を手にトイレへと向かった。
そして、数分後。
そこには変わり果てた絵里香の姿があった……
「どう……かしら？」
基本的に絵里香は、学校の制服を着ているとき以外は和服で過ごしている。あまり外出をすることはなく、習い事のために移動するときも大抵は和服だ。洋服を着る事は少なく、その際もあまり肌を露出させる事はなく、色合いも地味な物が多かった。
そんな絵里香の今の姿はと言えば、薄手の白い長袖のシャツを着て、薄桃色のスカート

を履いている。変装用に伊達眼鏡を掛け、その上ではブラウンのベレー帽が被せられてある。
「どこか、変ではない？」
決して派手とは言えないが、絵里香にしてみれば着慣れない服装だからか、自分の格好を何度も何度も確認していた。
「いえ、とてもよくお似合いですよ、お嬢様」
「そうですか？　ならよかった……では、正喜。後はお願いしますね」
「はい……でも、こんな物で本当に大丈夫なんですか？」
絵里香の着替えが入っていた鞄から、一枚の仮面を取り出す。何も描かれていない、白一色の仮面だ。
その名も、『マジカル☆フェイス』という。名前から分かるとおり、制作者はレイである。
「レオナルド様のお話では、これを付けるだけで絵里香様の身代わりができるということですが……」
「あの方がお作りになった物です。間違いはないでしょう。正喜、付けてみなさい」
「はい……」
半信半疑といった調子で仮面を身につける正喜。すると……
「私……？」
絵里香の前に、絵里香の姿が現れる。もちろん鏡などではなく、文字通り絵里香の前に実態を持った絵里香がもう一人いるのだ。
「お嬢様？」
目の前の絵里香の手が顔の近くで何かを掴む動作をすると、絵里香の姿が消えて正喜の姿が現れる。
「すごいわ……これなら大丈夫よ、正喜。安心してあなたに任せられるわ」
「そ、そうなんですか？　ボクにはよくわかりませんが……」
「それでは、後はお願いね」
「わかりました。お嬢様、くれぐれもお気を付けて」
「ありがとう、正喜。もちろんわかっていますわ」
ペコリとお辞儀をする自分の姿を背中に、絵里香は図書館を後にするのだった。

＊　＊　＊

「午前十時……か」
繁華街西入口にて、一人佇んでいたキースの口が小さく呟いた。近くにある屋外時計が十時を指した瞬間、キースは我知らず肩を落としていた。
「……クソッ、藤原め。やっぱりあいつの言う事なんて信じたボクが馬鹿だった」
吐き捨てると同時に、むざむざおびき出された自分が酷く情けなくなる。そして同時に、予想以上の落胆に胸が締め付けられそうになる。
「絵里香さん……」
名前を呼ぶと、それは余計に顕著となった。思わず胸に手を当てて掻き毟りたくなるほどにもどかしい。

「はい、キースさん」
「会いたいよ……」
「はい……私も、キースさんにお逢いしたかったです」
「……」
「……？　キースさん？」
「……」
……とりあえず、こう言うときどうすればいいのか。キースはとりあえずもっともベタな方法をとってみる事にした。
「イタタタタッ!?」
「キ、キースさん?!　一体どうなされたんですか?!」
突然自分の頬を力一杯つねったキースに驚いたのか、絵里香が慌てたように言った。そう、絵里香が言ったのだ。以前会ったときと格好が少々違うが、紛れもない絵里香の声が聞こえたのだ。
「ゆ、夢じゃない？　ほ、本当に絵里香さん？」
「はい。本当に、茜澤絵里香です。キースさん」
眼鏡の優しげな瞳が、ニッコリと笑った。キースの心臓が強く跳ねる。
「え、な……ど、どうして、ここに？」
「キースさんに会いに来たんです」
「ボ、ボクに？」
ものすごい勢いでキースの顔が朱くなっていく。まるで初めて告白された初な少年のように。
「はい。……ご迷惑だったでしょうか？」
「そ、そんなことあるはずがない！　そ、その……ボクも、絵里香さんに会いたかった、ですから」
「そう言ってもらえると、とても嬉しいです」
向かい合う絵里香の顔もまた、キースに当てられたように朱くなっていく。まるで初めて告白したような初な少女のように。
「それじゃあ、その……この後の予定は……？」
「キースさんにお任せいたします。恥ずかしい事ですが、私はあまりこの辺りに来た事がありませんから」
「そ、それなら、お任せ下さい。ボクが必ず楽しい休日にして見せます。退屈はさせません！」
「それは楽しみです。それでは、お願いしますね、キースさん」
そう言って、スッとキースの手が握られる。
「あ、あ、あ、あ、あの、こ、こ、こ、これは?!」
慣れないぬくもりと柔らかさにドギマギしていたため、思わず甲高い声が漏れる。そんなキースの様子を見て、絵里香は困ったように首を傾げる。
「異性とのデートの際は、こうやって手を繋ぐもの……と聞き及んでいたのですが……もしや、何か不作法をしてしまったのでしょうか？」
「デッ――!!?」
手を繋ぐだけでもいっぱいいっぱいだというのに、この上自称愛の貴公子初デートで

ある。平静などとてもではないが保てるわけもない。
「あ、う、あ……」
「キースさん？　どうかなされましたか？」
キースの人生初デートは、緊張のあまりカチコチに固まったあげく、連れの女性を心配させるという、あまりに情けなさ過ぎる始まり方をすることになったのだった。

＊　＊　＊

「まったく……あの男は一体何をやっていますの？　お姉様を前にあのような醜態をさらすなんて……やはり、あのような輩をお姉様に会わせるべきではなかったのでは……」
「まあそう言ってやるな、アイよ。まだまだデートは始まったばかりだ。長い目で見てやろうではないか」
「お兄様は甘すぎますわ。私なら、あんな男さっさと置いて帰ってますわ。そもそも、あの男とお姉様では全く釣り合いが取れませんわ。あんな軟弱で軽薄で口先だけのナルシストなど……」
「仕方あるまい。あれは絵里香が自ら望んだ事なのだからな。考えても見ろ、今まで親の言うままに生きてきた絵里香が、初めてこんなにも大胆な行動に出たのだぞ？　それだけでも今回の件は十分な価値がある」
「ですが――」
「……つーか、何してるんだよお前らは」
目の前で口論を交わす藤原兄妹を前にして、俊介は呆れたようにそう訊ねた。振り返ったレイが、心底不思議そうに首を傾げて答える。
「見てわからんか？　ストーキングだが？　あるいは出歯亀でもいいが」
「堂々と言うようなことじゃないだろ！」
そうなのである。俊介達――藤原兄妹＋風見兄妹＋健一――は現在繁華街にて、キース達から距離を取ってストーキングの真っ最中なのだった。藤原兄妹に至っては、双眼鏡まで用意しているという徹底ぶりだ。それが繁華街の人混みの中で役に立つかどうかは別問題だが。
「そう怒るなシュンよ。お前とて興味があるからこうやってここに来たのだろう？」
「お前が重要な用があるから来いっつったんだろ！　それが来てみりゃなんだよ？　ストーカーの真似事じゃねえか！」
「ストーカーだと？　幼馴染みの身を案じることが悪い事のどこがストーカーだというのだ！」
「逆ギレかよ！　大体お前さっき自分でストーキングだの出歯亀だの言ってたじゃねえか！」
「ストーキングの何が悪い！」
「開きなおんな！　……クソッ。大体こんな手で呼び出されるの何回目だよ。いい加減学習しようぜ、オレ……」
ガックリと肩を落とす俊介。だが、そうやって騙されるのが俊介の俊介たるところなので、誰もつっこまずに温かい目で見るだけである。
「まあそう怒るな。お前とて絵里香とキースの事が全く気にならなかったわけではないだ

ろう?」
「オレはお前みたいに悪趣味じゃねえよ」
「そう思って気を利かせてやったんだ。むしろ感謝をして欲しいぐらいだな、うむ」
「ホントたまにでいいから人の話聞こうぜ……」
疲れ切った声で言った俊介に、レイは「気が向いたらな」と、余計に俊介を疲れさせる返答をするのだった。
「……というか、何故俺がここにいるんだ?」
今回は完全にアウェーなはずの健一が独り言のように呟いた。
「お前が仲間外れにならないようにという俺の配慮の結果だ。なに、礼はいらんぞ」
「……全く状況が分からないんだが」
「えっとね、キース君が今日初めてデートなんだよ」
「それは見ればわかるんだが……」
「相手は絵里香さんなんだよ」
「……絵里香って誰だ?」
「えっとね、キース君のデート相手なんだよ」
「……すまん、風見。何とかしてくれ」
「オレに振るなよ……」
まだ今日は始まったばかりだというのに、すでに一日分の疲労を背負うこととなる二人なのだった。

＊　＊　＊

デート開始直後に硬直してしまうという大失態を演じながらも、なんとか我を取り戻したキースは、改めて絵里香とのデートを開始したのだった。
緊張のあまり、キースの口から出る言葉はどれも拙い物になってしまっていたが、絵里香は気にした様子もなく、純粋に会話を楽しんでいるように見えた。むしろそれは、普段キースの叩く軽口などよりも、拙い分絵里香の心に響くものがあったのからなのかもしれない。
絵里香が聞き上手だったため、矢継ぎ早とまでは行かずとも会話は途切れることなく続いていった。そうしているうちに、キースも少しずつ自分のペースを取り戻していき、異性とのデートのために（一人で）歩き回って調べ尽くした繁華街を案内していく。
それは、何も知らない人が見れば本当に恋人同士のように見えるデートだった。
本人が言ったとおり、絵里香は繁華街の事をほとんど知らなかったようで、服屋や本屋、喫茶店等々、キース達にとって普段使っている施設にも興味を示し、純粋に喜び楽しんでいるようだった。
今まで、予定だけで一度も消化した事の無かったデートプランが役立ったことを喜びながら、隣にいる人が絵里香でいる事に幸せを感じながら、二人のデートは順調に進んでいく。
「キースさん、ここはどういうお店ですか?」
絵里香が物珍しそうに店内を見回しながら訊ねる。
「ここはファンシーショップと言って、小物やぬいぐるみなんかを扱う場所なんですよ」

得意げに答えながら、キースは店内の一角へと絵里香を案内する。シールやメモ帳、便箋などのキャラクターグッズの売り場から離れて、やって来たそこには大小様々なぬいぐるみが並べられていた。
「可愛い……」
「気に入ってもらえましたか？」
「はい。とっても」
そう言って、嬉しそうにぬいぐるみを順番に手に取っていく。
虚飾のない笑顔を見ながらキースは思う。その笑顔を見れば、男一人でファンシーショップに入り、店内をくまなく見回った苦労も報われるという物だ。
「よろしければ、一つプレゼントしますよ」
「本当ですか？　あ、いえ……やはりそのようなことは……」
絵里香にしてみれば、自分のためにキースがお金を使うと言う事に躊躇いを憶えるのだろう。だが、キースが一瞬浮かんだ喜びの表情を見逃すはずがなかった。
「駄目ですよ、絵里香さん」
「えっ……駄目、とは？」
「デートでは男性が女性にプレゼントを贈るのが礼儀という物なのです。だから、絵里香さんが受け取ってくれなければ、ボクは不作法な男になってしまう」
「そ、そうなのですか？」
「そうなんです。だからどうか、ボクにプレゼントをさせていただけませんか？」
恭しくお辞儀をして見せたキースを、熱に浮かされたような目で絵里香が見た。
「では……」
顔を真っ赤にし、俯きながらおずおずと一体のぬいぐるみが差し出される。
「この子が……欲しいです」
恥ずかしそうにそう口にした。もしかしたら、誰かに物をねだるのは初めての事なのかも知れない。
「わかりました。では、少しだけ待っていてください」
差し出された茶色いクマのぬいぐるみを受け取って、レジへと歩いていく。大きさは胸に抱ける程度で、飾りも首に赤いリボンが一つ付いているだけの質素な物だった。
それでも、絵里香は送られたそれを胸に抱いて幸せそうな笑顔を浮かべていた。
「ありがとうございます、キースさん。私、この子を一生の宝物にします」
そう言われた瞬間、キースは思わず悶え死ぬかと思ったのだった。
楽しかった。
もっと綺麗な言葉で言うなら、幸せだった。
生まれて初めて、ずっと望んでいた女の子とのデート……だからじゃなかった。隣にいる相手が、絵里香だからだった。もしもこれが他の女の子だったらきっと、キースはいつもと同じような軽口ばかりを叩いて、自己満足を得るだけだっただろう。
だが、このデートは違った。キースはまず自分よりも絵里香に楽しんで欲しいと、絵里香の事ばかり考えて一日を過ごしていた。その結果、絵里香はたくさんキースに笑いかけ、その分キースはそれを嬉しく思っていた。
それは、今までキースが感じた事のない類の幸せだった。
だから、ずっと続いて欲しいと願った。

また次も、こんな機会が欲しいと思った。
日が落ちて、別れなければならない時間がやって来て、絵里香を家に送っていく時も、ずっと、そう思っていた。そしてそれは、きっと叶うと思っていた。
……だが、
「随分と遅いお帰りですね、お嬢様」
「……伊集院さん」
門の前で、絵里香の帰りを待つように立っていた誠一郎の、
「我が儘は一度だけと、そう申したはずです」
無表情ながら咎めるような口調。それが何に対する責め句なのかに気づいて、キースの背中を冷たい汗が滑り落ちた。
わかっていた。
絵里香が自分とは身分の違う、いわゆるお嬢様である事ぐらい。自分には、塀で囲まなければならないほどの敷地を持つ屋敷も、自分の面倒を見る執事もいない。所詮は一般庶民であると。
それでも、絵里香はキースに会いに来てくれた。だから、キースはどこかで絵里香を自分と対等な関係だと思ってしまったのかも知れない。
だが、現実は目の前にある。
仁王立ちする屈強な男は、まさに自分達の仲を引き裂くために待っていたようではないか。
「……確か、キース様、でしたか？　申し訳ありませんが、お嬢様はこれよりお帰りになられます。そして、金輪際貴方と会う事はありません」
「伊集院さん！」
だとしたら、どうする？
「同じ事を何度も言わせないでいただきたい」
……決まっている。
「ですが！　私はまだ、キースさんと……」
そっと、絵里香がキースの腕を掴んだ。その手にはほとんど力がこもっておらず、怯えるように小さく震えていた。キースは、そっとその手に自分の手を重ねた。
「キースさん……？」
絵里香を安心させるように一度その手を握った。まるで、絶対に絵里香を渡さないと言わんばかりに。
「……何のおつもりでしょうか？」
「何のつもりか、だって？　ふんっ。君こそ何のつもりだ？　いきなり横から割って入って来て、本人の意志を無視してボク達の仲を引き裂こうだ等とどういう了見だい？」
「私の職務には、お嬢様に寄ってくる悪い虫を追い払う事も入っておりますので。これ以上手間を掛けさせるというのなら、実力で貴方を排除することも厭いませんが？」
「へえ……」
ピクリとも表情を変えずに言い放つ誠一郎に大して、キースは不敵に笑ってレイピアを抜いた。
「面白いじゃないか。このボクを相手に戦うつもりなのかい？　それはまた、随分な思い上がりだ」

「思い上がっているのは、果たしてどちらでしょうね？」
「無論、そちらに決まっている！　風よ集え！　美しきボクの元へ！」
キースの構えるレイピアに魔力によって生まれた風が集まってくる。対する誠一郎は、表情をピクリとも動かすこともなく、キースの姿を静観していた。
「受けるがいい！　秘剣！　ソニックスラスト！」
風が震え、局地的な嵐が誠一郎を襲う。巻き上がる砂埃の中に誠一郎の姿が消える。僅かたりとも避ける素振りを見せず、直撃を受けたのだ。
「ふんっ、口ほどにもない」
あまりにもあっさりと決着がついてしまった。
……少なくとも、キースはそう思っていた。
だが、
「まったく、その通りですね」
粉塵の向こう側から、無傷どころか、着ている服に切れ目一つ入っていない、誠一郎の姿が現れる。
「そんな……馬鹿な⁉　ボクの魔法の直撃を受けて無傷なんて……」
「学生のお遊び相手と、魔法使いを同じだと思っては困りますね」
「くっ――ガッ⁉」
キースがレイピアを構えるよりも早く、一瞬で間合いを詰めた誠一郎のボディーブローが打ち込まれる。
「が……あ……はあっ……あ……」
灰の中から酸素が追い出され、キースの体はそこで崩れ落ちる。
「キースさん！」
「お下がりください、お嬢様。まだ終わってはおりませんので」
「そんな！　やめてください、伊集院さん！」
絵里香の声など聞こえないかのように、誠一郎が片手で襟首を掴んでキースの体を持ち上げる。互いの目の高さが合わせられ、感情の見えない瞳に睨まれる。
「私としても、お嬢様の恩人にこれ以上暴力を振るいたくはありません。ここで諦めてお帰り願えないでしょうか？」
言葉こそ丁寧だが、そこには有無を言わせない響がある。
相手はキースが普段喧嘩をふっかけている俊介とは違う。年齢も違えば体格も違う、単純な腕力でも恐らく上を行くだろう、何より貫禄が違った。誠一郎の言う学生のお遊びではない、戦いをくぐってきたのかも知れない。
そんな相手を前に、全く恐怖を抱かずになどいられない。無表情無感情がそれに拍車を掛ける。今すぐにでも謝って帰りたかった。これがもし、俊介の喧嘩と同じ類の物ならあっさり謝っていただろう。
だが、
「ペッ」
キースは誠一郎の顔に唾を吐いた。
「……」
無言でそれを拭った誠一郎の拳が、キースの顔面を打った。鼻の骨が折れたかと思うほど強烈な一撃に、頭の中が真っ白になる。

それはほんの一瞬の事だったのだろう。意識が戻った瞬間、キースの体は地面に放り出されていた。その前には、キースを庇うように立った絵里香の姿。
「もう……やめてください、伊集院さん」
「お嬢様がもう二度と我が儘を申さないと約束していただけるなら、すぐにでも」
「っ……」
そう言われた瞬間、絵里香の体がビクッと震えた。小さく、肩が震えていた。
ほんの僅かな空白の時間。……ゆっくりと、絵里香が振り返った。
今にも泣き出しそうな目で、今にも泣き出しそうな笑顔を浮かべて、小さく、呟いた。
さよなら、と。
そして、一歩。キースに背を向けて歩く。
「行くな!」
と、そう叫びたかった。立ち上がって、絵里香の手を取って、引き留めたかった。
だけど、声は出なかった。体は動いてくれなかった。
ゆっくりと、無情にもキースの目の前で門が閉まっていく。キースの世界から、絵里香の姿が消えていく。失われていく。奪われていく。
それでも、体は動かなかった。
完全に門が閉じて、首をあげている事すらも辛くなって、頭が地面に着いた。
見上げた空の茜色が胸に浸みて、心が痛くなった。その痛みが血管を伝って頭に上って、
「うっ……くっ……」
キースの目から、涙がこぼれた。
目を逸らす事も、ごまかすことも、言い訳すら許されない決定的な敗北。
どう取り繕おうとも、覆らない。
「無様だ……ボクは……なんて、格好悪い……」
誠一郎に負けてしまったから……ではない。
道の真ん中で倒れて涙を流しているから……でもない。
守りたかった人を守れず、最後に庇われた自分が、格好悪くて情けなかった。
この日、この時、
キースは、涙と共に、初めて敗北を真っ向から受け止めさせられ、その悔しさを噛み締める事になったのだった……

＊　＊　＊

「「「「……」」」」
そのあまりの光景に、俊介達はおろか、冗談半分でストーキングしていたレイですら何一つ言葉を絞り出せずにいた。
千里がキースの元へと駆け寄ろうとしたが、それを俊介は首を振ってそれを止めた。今駆け寄ったところでキースに掛ける言葉など一つとしてない事を、俊介はこの場の誰よりもよく知っていたのだ。
かつて俊介もまた、キースと同じく目の前で大切に思っていた存在を奪い取られていた者だったから。
「……お兄様」

「ああ……予想していた結末とはいえ、直に見るとどうにも……苦しい物があるな」
「……わかっていたなら、もっとやりようがあったんじゃないのか？」
責めるような健一（けんいち）の言葉に、レイは苦い物を噛んだような声で答える。
「それでも、必要だったからだ。絵里香（えりか）と付き合うと言う事は、ああいう事なのだよ」
「だとしても――」
「ああ、わかっている。責任は取るさ」
いつものような飄々とした声でそう言って、
「……そう、必要な事なんだ、これは」
誰にも聞こえない声で、そう呟いた。